コロナ危機における
喪失経験とパストラルケア

才　藤　千津子

はじめに

2000年以来，人類は，「コロナ危機」という大変な出来事の中を生きてきた。コロナ以前の世界が戻るにはいつまでかかるのか，そもそもコロナ以前の世界が戻ってくるのかはわからない。私たちは，日本国内で新型コロナウイルスが初めて発見されてから３年間，現在までに合わせて８回の感染拡大の波を経験してきた。現在の第８波では，2023年１月時点において70歳以上の高齢者で基礎疾患を患っている人たちを中心に死者数が急増するという厳しい状況が続いており，なかなか収束の兆しが見えない[1]。

しかし，新型コロナウイルスとの付き合いも丸３年となった今，政府は，感染対策をしながらも，「ウイズ・コロナ」「ニューノーマル」社会に向けて行動制限を緩和してゆこうとしている。また，2023年１月のＮＨＫの調査によると，感染拡大が「不安だ」という声は依然として84％と多いものの，３年前に行なった調査からは１割ほど減っており，特に若い世代を中心に，コロナ感染への不安を感じる度合いが下がっている[2]。

1　讀賣新聞「第 8 波のコロナ死者，9 割超が 70 歳以上…高齢者施設の感染者対策『特に重要』」讀賣新聞オンライン，2023-01-15
https://www.yomiuri.co.jp/politics/20230114-OYT1T50289/（参照 2023-01-19）

2　NHK「新型コロナ国内初確認から 3 年『不安だ』依然 84％　NHK 世論調査」NHK WEB (2023-01-15)　https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230115/k10013950241000.html（参照 2023-01-15）

ただ，これは決してコロナが収束して「コロナ以前の世界」が戻ってきたことを意味するわけではない。少し油断すれば再び急激な感染者数の増加に繋がることは，今までの経験から想像に難くない。その意味で，危機はまだ終わっていない。

ウイルスを制御し感染症から身を守るため自宅での待機や隔離を余儀なくされてきたため，私たちは，孤立と孤独のなかでコロナ感染拡大が引き起こす様々な厳しい現実に直面してきた。加えて，コロナ・パンデミックは，様々な領域にわたって，人々の中に不確実さへの不安と死への恐れを呼び起こした。今や，未来は予測不可能で，誰も完全に確実な答えを持っている人はいないように思われる。

Health and Social Care Chaplaincy というチャプレンシーに関する専門誌のCovid-19に関する特集号において，編集委員は，コロナ・パンデミック発生後最初の６ヶ月間に多くの国で患者に対応した病院チャプレンたちが経験した出来事を紹介している。そして，コロナ・パンデミックによって引き起こされた生への懸念は，死そのものへの恐怖ではない，本当の懸念は，自分たちが始めたわけでもないコントロール不可能な病気によって，愛，笑い，友情，アイデンティティ，ひいては親族やコミュニティとの接触を失ってしまったことであると述べている。さらに，健康上の緊急事態から始まって世界中で人材と技術を奪い合う事態が起こり，それは世界的な経済不況に追い討ちをかけ，その全容が見えないほどの多くの深刻な格差を生んでいると憂慮する[3]。

コロナ・パンデミックは，教会にとっても試練の時であり危機でもある。パンデミックの発生とともに，世界中の教会は対面での礼拝や祈祷会などの集会を取り止め，あるいは礼拝堂を閉鎖した。人々が教会に集うという伝統的な形態は一時停止し，対面での話し合いや牧会訪問といった牧会的な役割はその方法を変えなければならなくなった。人々が共に集まって讃美歌を歌い，祈る機

3　Lindsay B. Carey, Chris Swift & Meg Burton, “Editorial, COVID-19: Multinational Perspectives of Providing Chaplaincy, Pastoral, and Spiritual Care,” *Health and Social Care Chaplaincy (HSCC)* 8.2 (2020):133-142.

会を失った教会は，代わりにビデオやオンラインという新しい方法によって礼拝を行うようになった。しかし，携帯電話やコンピューター，Wi-Fi を利用できない人たちはそれから排除され，ロックダウンの厳しい規制のため連絡が取りにくくなった人も多かった。

このような状況の中で，教会に集う人々にとって最も深刻だったことの一つは，対面での牧会と仲間との交わりが失われたことである。たとえ教会員が入院しても，牧師は病院内には入れず電話以外に連絡手段はなかった。また，大切な友人や家族を亡くした人の多くが，葬儀や埋葬などに参加することができなかった。対面での礼拝の中止と礼拝堂の閉鎖の結果，以前は毎週または毎月行われていた主の晩餐に預かることができなくなった教会員も多い。

以上のような世界共通の体験に加えて，それぞれの地域の歴史や背景によって，パンデミックの影響は様々な様相を呈した。

例えば，アメリカでは，アフリカ系アメリカ人への暴力や殺害，人種差別への抗議から始まったブラック・ライブズ・マター運動がコロナ・パンデミック下で大きな広がりを見せた。2000年５月，白人警官による理不尽なジョージ・フロイド殺害事件に触発された暴力や人種差別への怒りと悲しみの輪が，アメリカ社会のみならずグローバルで大規模な運動へと発展したのである[4]。イタリアでは，2020年，信徒への牧会訪問，病者の塗油など司祭としての務めを誠実に果たしていたカトリック司祭が，相次いでウイルスに感染して命を落とした[5]。また，2020年の香港のキリスト者たちは，容疑者引き渡し条例改正案への抗議デモ，香港国家安全維持法の施行という厳しい状況と苦悩の中で，コロナ・パンデミックによる影響を受けた[6]。アフリカ，ガーナの牧師は，パンデミック

4　Rita Nakashima Brock, “The Pandemic Paradox-George Floyd, Moral Injury, and the Sustainability of Social Movement,” in Zachary Moon, ed., *Doing Theology in Pandemics: Facing Viruses, Violence, and Vitriol* (Eugene: Pickwick Publication,2022): 1-14.

5　Bramstedt, Katrina A., “COVID-19 as a Cause of Death for Catholic Priests in Italy: An Ethical and Occupational Health Crisis,” *Health and Social Care Chaplaincy* Vol. 8 No.2 (2020):180-190.

6　Calida Chu, “Theology of the Pain of God in the Era of COVID-19: The Reflections on Sufferings by Three Hong Kong Churches through Online Services,” *Practical Theology* Vol.14. Nos.1-2(2021):22-34.

の危機が始まった時，それは世界を終わらせるための神の罰であるとか，キリスト教を弾圧するための反キリストの道具であるとか主張する一部のキリスト者に対抗して，健全な神学的・牧会的な指針を示し，人々に責任ある市民としての行動をとるように呼びかけなければならなかった[7]。また，南アフリカの教会では，コロナ・パンデミック下においても，この若い民主主義国家の過去から始まって現在に到る人種差別や紛争，不正に根差す根深い多世代・多層的なトラウマに取り組むことが要請されている[8]。

コロナ・パンデミックの影響で苦しんでいる人々に，教会は，福音を宣べ伝え，隣人へのケアを提供する使命を負っている。Rabson Hove は，コロナ危機は，教会にとって困難な時ではあるが，同時に教会が新しく様々なパストラルケアの方法に取り組むチャンスでもあると指摘する[9]。何が必要とされるかは人々の考え方やコンテクストによって異なるため，私たちは，それぞれのコンテクストに応じて，教会と地域社会のニーズに応える新しいアプローチを策定する必要がある。

厚生労働省のまとめによると，2023年１月24日現在，日本ではコロナウイルス感染によって累計62,929名の死者が出ている[10]。これら亡くなった方たちの遺族は，コロナ危機の孤立の中でどのような弔いをし，どのように悲しみの時を過ごしてこられただろうか。東日本大震災をきっかけに，日本では様々な遺族のグリーフ支援のためのサポートグループができたが，コロナ危機の中で，多くの団体が対面での通常の支援活動を中止せざるを得なくなったという報

7　Isaac Boaheng, “Christianity and the COVID-19 Pandemic: A Pastoral and Theological Reflection from the Ghanaian Context,” *Journal of Pastoral Theology* Volume 31, Issue 2-3(2021):224-237.

8　Christoffel H. Thesnaar, “Divine Discomfort: A Relational Encounter with Multi-Generational and Multi-Layered Trauma,” *Religions,* 13(3) (2022):214.

9　Rabson Hove, “The Pastoral Presence in Absence: Challenges and Opportunities of Pastoral Care in the Context of the Global Coronavirus Pandemic,” *Pharos Journal of Theology*, online Volume 103 (2022) https://doi.org/10.46222/pharosjot.10319

10　厚生労働省ホームページ「データからわかる－新型コロナウイルス感染症情報－」https://covid19.mhlw.go.jp/（参照 2023-01-24）

告がある[11]。また，日本ではコロナウイルス感染によって様々な悲しみを経験してきた人々の声を公に取り上げ，社会として犠牲者を弔う声が聞かれることはあまりないが，そのような中においても他者へのケアの場や仕事の持つ宗教的・スピリチュアルな意義を伝える必要性を論じるものもある[12]。

加えて，「喪失体験」，つまり何かを失う体験というのは，身近な人の死だけを指すのではない。大切な人間関係の喪失，経済的支えの喪失，失業，健康など体の機能の衰え，自分の生命を失うかもしれないと言う恐れ，自分が果たしてきた役割の喪失，家族と会えないこと，礼拝に出席できないこと，人生における価値観や信仰の揺らぎ，そして公正な世界に生きているという世界への信頼感が揺らぐことなど，多くの事柄が含まれる。私たちは，コロナ危機発生以来，長期間にわたって様々な痛みと悲しみにさらされてきたのである。

喪失体験の癒しのプロセスは，喪失が起こったことを受け入れ，その痛みを充分に感じることから始まると言われる[13]。私たちは，コロナ危機の中で，いったい何を失ってきたのだろうか。いったいどこで，誰が，人知れず傷つき，倒れているのだろうか。教会は，コロナ危機の中で私たちが経験してきた喪失と痛みについて，語り合い，支え合い，この時代に必要とされる教会のわざとはどのようなものかについて，それぞれが考え，実践する必要に迫られているのではないだろうか。喪失の時に互いに支え合う能力を養うために，教会共同体や地域共同体で何を行うかを考えることが，今ほど強く求められている時はないように思われる。

本論文では，コロナ・パンデミックにおけるさまざまな課題の中から，「危機」「喪失経験の積み重ね」「あいまいな喪失」という点に注目する。ジョン・パットンなど今日の牧会学者が危機やグリーフへのパストラルケアについて述べていることを紹介しながら，コロナ危機において現在教会において必要とされている，あるいは期待されているパストラルケアとはどういうものかについて考察したい。

11　坂口幸弘・赤田ちづる「コロナ禍における死別－新たな遺族支援の展開を探る－」『人間福祉学研究』14(1) 2021: 53-73.

12　島薗進「新たな感染症の時代の弔いとケア－宗教的なものの新たな様態－」『宗教研究』95(2) 2021:32-35.

13　ロバート・A・ニーメヤー（鈴木剛子訳）『〈大切なもの〉を失ったあなたに－喪失をのりこえるガイド』（春秋社, 2006），70-74.

1　危機としてのコロナ禍

本論文で，私は，一般によく使われる「コロナ禍」という言葉ではなく，「コロナ危機」と言う言葉を使いたい。なぜならば，私は，新型コロナ感染拡大がもたらしたものは単なる「禍（わざわい）」ではなく，「危機」，すなわち，私たちが従来のやり方では対応しきれないような「急激な変化」だと考えるからである。そして，世界は今，新型コロナウイルス感染症によるパンデミックの他にも，環境破壊と気候変動，大規模な自然災害，ロシアのウクライナ侵攻，それに伴う所得や資産の格差の拡大という幾つもの危機的出来事を経験している。

「危機」という言葉には，必ずしも明確な定義があるわけではない。しかし，例えば，かつて危機理論の提唱者である精神医学者キャプランは，危機とは不安の強度な状態で，予期できない大きな喪失などの困難に直面して，自分が普段持っている問題対処能力では対応できないときに経験する事態だと述べた[14]。危機において心の平衡状態が大きく揺さぶられるために起こるおけるさまざまな反応は，その人の弱さや精神的な病の徴ではなく，危機という危険な状況への「正常な」反応である。もっとも，時間はかかるが，多くの場合，人は再度心の安定を取り戻し，環境に再適応することができる。また，危機を乗り越えてゆく体験は，人々が新しい何かを獲得する機会ともなり得る。危機を経験し，それを乗り越えることで，人も共同体も，それまでよりも成長してゆくことができるし，新たなものの見方をするようになる可能性も生まれる。よって，危機の時は大いなるチャンスの時でもある。

危機（crisis）という言葉の語源は，ギリシャ語で「時」を表す言葉のひとつ，「カイロス」であり，機械的に流れる時間「クロノス」に対して，内面的な意味のある時間，神との出会いや運命の時を意味する。コロナ・パンデミックによって，私たちはいくつものカイロスの時を喪失した[15]。例えば，コロナ危

14　G.キャプラン（山本和郎訳）『地域精神衛生の理論と実際』（医学書院，1968 年），23 他.

15　Viki Matson, “Grieving *Kairos* Moments,” *Journal of Pastoral Care and Counseling*, 75(1) (2021)https://doi.org/10.1177/1542305020953774

機の中，多くの大学では対面での卒業式が中止された。青年期の貴重な一時期を終えて社会人として巣立とうとしている若者にとって，卒業式は，大学生活のプロセスの集大成という意味でクロノスの瞬間であると同時に，神のタイミングというという意味でのカイロスの瞬間でもある。卒業式に参加できなかった若者は，二度と取り戻せないカイロスの瞬間を失ったのである。

新型コロナウイルスは，２つの危機をもたらしたと言えるのではないだろうか。一つは，喪失体験とトラウマティックな出来事の積み重ねによって，人々が，感情的に，身体的にだけではなく，霊的にも脅かされた結果，それまで理解してきたあらゆるやり方・価値観が通用しないという「意味の危機」を経験していることである。

この危機は，既成の社会システムの安定に対する私たちの信頼を揺るがしただけではなく，私たちを取り巻く「世界そのもの」に対する理解と信頼を覆したと言われる[16]。人間は「意味の創造者」である。私たちは，日々，必ずしも意識はしなくても，自己の体験について何らかの意味づけをしており，その根拠になる自分なりの「意味の体系」を持っている。この場合の意味とは，この世を理解する方法，人生の目的や意義，生きることに見出す意義，人生の中核的な価値観である。そして，その体系の中核には，これまでの人生経験から割り出した「想定された世界」があり，人は普段は自覚してはいないが，日々それを判断基準にして行動し，現実の出来事を理解し，解釈している[17]。私たちは，経験的・習慣的に，自分の住む世界はある程度「予測可能で安全」だと「想定」し，その想定のもと安心して生活しているのである。

しかし，今回のコロナ危機のように，突然不慮の事故，不測の事態が起こると，その時改めて，自分が思い込みつまり「想定」の上に生きてきたのだと言うことを思い知らされる[18]。コロナ危機の中で私たちは，事柄を予測できコン

16　Kirsten Weir, “Grief and COVID-19: Mourning our Bygone Lives,” *American Psychological Association Home Page*（April 1, 2020）https://www.apa.org/news/apa/2020/grief-covid-19（参照 2023-01-17）

17　ニーメヤー『〈大切なもの〉を失ったあなたに』130-132.

18　同上,82.

トロールできるという感覚，自分の子どもや愛する高齢者を護ることができるという信念の感覚を失ったと心理学者ロバート・ニーマイヤーは説明する[19]。これは「意味の危機」でもある。神学者 D. J. Louw は，コロナウイルスは，私たちの存在の根源を貫く実存的な危機を生み出していると言う[20]。コロナ危機からの問いかけは，私たちに，生の意味，人生の実存的な現実と私たちの存在の根源を問い返すことを迫っているとすら言えるかもしれない。

以上のようにコロナ危機は，私たちの生活だけではなく，価値観や人生の「意味」をも揺り動かした。私たちは問う。「生はどうしてこのような苦難に満ちているのか」「なぜそれが私に起こるのか」，「神はどうしてそれを許されたのか」「今，神はどこにおられるのか」。そして，このような「意味の危機」が中核にあるという意味で，コロナ危機の中核には宗教的問いがあると言えるであろう。おそらく，この危機の後，私たちの生活は今までとは同じものではなくなるだろう。この先に何があるのだろうか。私たちはどこへ行くのだろうか。そして，今起こっていることにはどんな意味があるのだろうか。コロナ危機における試練の時は，人が神との関係や人との関係を見つめ直すとき，信仰共同体である教会とは何なのかを考え直すときでもある。

そして，もう一つの危機は，コロナ危機以前から存在していた社会の構造的な不正が顕在化したことである。牧会学者 Melissa M. Kelley は，貧困や暴力など「社会の不正に起因するグリーフ」[21]を，本来起こってはならないものだと指摘し，それを癒すために，社会の不正を改める預言者的な行動の必要性を訴える。コロナ危機以降の日本社会では，現実には存在していたけれども隠されていて人々が見ようとしていなかった様々な社会的格差の現実が顕在化してきた[22]。そのような問題の一つが，女性や子ども，若者，年金生活者や失業者，

19　Weir, “Grief and COVID-19: Mourning our Bygone Lives.”

20　D. J. Louw, “The Aesthetics of Covid-19 within the Pandemic of the Corona Crisis. From Loss and Grief to Silence and Simplicity-A Philosophical and Pastoral Approach,” *Acta Theologia,* vol.40 n.2, 2020, 125-149.

21　Melissa M. Kelley, *grief: Contemporary Theory and the Practice of Ministry*. (Minneapolis: Fortress Press, 2010), 11-16.

22　山田昌弘『新型格差社会』（朝日新聞出版，2021）5.

外国人労働者など，社会経済的に不利な立場に置かれた人々の負担やリスクが増し，社会的格差とそれに起因する健康格差の悪循環が強化されたことであると言われる[23]。

２　「喪失体験」の積み重ねとしてのコロナ危機

今回のような疫病のパンデミック（大流行）は，人々の精神や行動に多大な影響を及ぼす。例えば，約100年前にスペイン風邪が流行した当時のヨーロッパでは自殺者が増加し，精神疾患による入院患者数が急増した[24]。また2002年から2003年にかけて流行した SARS (severe acute respiratory syndrome)では，医療従事者の間にアルコール依存や薬物乱用者が増加した[25]。今回の新型コロナパンデミックにおいても，その影響について様々な分野で調査研究がなされている。

危機にある人の多くは，自分にとって非常に大切なものをすでに失っているか，失うかもしれないと言う恐れを抱いていると言われる。この間，人々は，自ら気づいている以上に多くの喪失を経験しており，悲しみの積み重ねを経験している。心理学者は，コロナ・パンデミックは，私たちが日常生活で慣れているよりも多くのレベルで悲しみを呼び起こしていることに注意を喚起し，支援の必要性を訴えている[26]。

23　圓増文「深刻化する社会経済的格差と健康格差の悪循環」大北全俊他『「コロナ」がもたらした倫理的ジレンマーパンデミックは私たちをどう変えたか』(日本看護協会出版会,2022) 55-63.

24　James C. Harris, “Self-Portrait after Spanish Flu,” *Arch Gen Psychiatr*y 63(4) (2006):354-355. doi:10.1001/archpsyc.63.4.354

25　Ping Wu, et al., “Alcohol Abuse/Dependence Symptoms among Hospital Employees Exposed to a SARS Outbreak.” *Alcohol and Alcoholism,* 43(6) (2008): 706-712. doi.org/10.1093/alcalc/agn073

26　例えば，Stephanie Pappas, “Helping Patients Cope with COVID-19 Grief：The Pandemic has Drastically Altered the Way People Mourn,” *American Psychological Association, Monitor on Psychology*, June 1, 2021, Vol. 52 No. 4:38.　https://www.apa.org/monitor/2021/06/ce-covid-grief

また，最近の出来事によって，喪失と悲嘆，そして葬儀をめぐる風景が大きく変わってしまった。アメリカでホスピス･チャプレンとして働いている Karen Murphy は，コロナ・パンデミック下において愛する人を失った家族の体験について，以下のように述べている。第一に，社会的距離を置くことが強制されるため，家族は人生の最後に愛する人と一緒にいることができなくなった。愛する者の死に備える者は，死の瞬間に立ち会えないことへの罪悪感や怒りに直面する。第二に，葬儀は少人数の近親者だけで行われるようになった。悲しみは，通常，共感してくれる人たちによって共有され，見守られることで慰められるものだが，現在，私たちが最も助けを必要とするときに，大切な人や友人，同僚からの支援が受けられていない。第三に，今回悲劇的な死別を経験した多くの人々は，自分でもよくわからないままに自分を圧倒する感情を抱えたまま，その悲しみに対処していかなければならない[27]。

加えて，家庭内や施設などで感染があって亡くなった場合には，遺された家族には「感染させて しまった」，「救えなかった」という自責感に苛まれることも予想される。また，欧米では，アジア系の人々への公共の場での嫌がらせや暴力が見られたし，日本でも感染者や医療従事者への中傷や差別的発言が報道された。

悲しみは，喪失に対する人間の通常の反応である。コロナ・パンデミックのような状況下で落ち込みや不眠などを経験する人々は，異常な状況に対して正常な反応を示しているのである[28]。これまでの悲嘆研究によって，悲嘆にはいくつかの様態があると言われているが，この時期に人々の多くが経験したものもそのようなものであった－すなわち，不確実性が引き起こす悲しみ（あいまいな喪失），自分や愛する人が感染するのではないか，あるいは死ぬのではないかと不安になりそれによって喪失を予期して起こる悲しみや，卒業式や結婚

27　Karen Murphy, “Death and Grieving in a Changing Landscape: Facing the Death of a Loved One and Experiencing Grief during COVID-19,” *Health and Social Care Chaplaincy*, Vol.8, no.2(2020):240-250.

28　Mary Divine, (2020, April 5). “UMN family therapist Q&A: Grieving the Losses Amid Coronavirus Pandemic,” *Pioneer Press*, retrieved from https://www.twincities.com/2020/04/05/umn-family-therapist-qa-grieving-the-losses-amid-coronavirus-pandemic/ (参照 2023-01-16)

式などの人生の大きな節目にあたるイベントが失われることを予想して起こる悲しみ（予期悲嘆）[29]，および持続的で強い悲しみ（複雑な悲嘆）である[30]。

3　コロナ・パンデミックと「あいまいな喪失」

新型コロナ感染発生以来，人々は，感染拡大の終息が見通せない，自分の生活をコントロールすることができないという不安や不確かさと闘ってきた。医療関係者，研究者，政治家，その他多くの専門家が，感染の終息や安全な生活について明確な答えを提供するために努力しているが，いまだ不確実なことが多い。そして，そのような中，人々は，いつまでこのような状態が続くのか，いつになったらかつてのように礼拝など集会に気兼ねなく集えるのか，大きな声で誰にも遠慮せず讃美歌が歌えるのか，互いに語り合いながら楽しい食事の時が持てるのか，誰にも予測がつかないという不安や恐れ，怒りを抱いてきた。コロナ危機は，個人だけではなく共同体レベルでも悲しみの時である。

アメリカ，ニューヨークの9.11同時テロ多発事件や日本の東日本大震災など，大規模な災害の被災者を支援した心理学者の一人，ポーリン・ボスは，大規模災害支援の経験から「あいまいな喪失」という考え方を提起している。ボスによれば，「あいまいな喪失」とは，「喪失しているかどうかがはっきりしないまま，解決することも，終結することもない喪失」[31]である。ボスは，あいまいな喪失は，その不確実性と終結のなさを考えると，喪失のなかでも最もストレスが高いものであると言う[32]。そして，このようなあいまいな喪失の大前提は，私たちには問題そのものを解決できないことである。

29　Mary Divine, (2020, April 5). “UMN Family Therapist Q&A: Grieving the Losses Amid Coronavirus Pandemic.”

30　Rebecca F. Bertuccio, & Megan C. Runion, “Considering Grief in Mental Health Outcomes of COVID-19.” *Psychological Trauma: Theory, Research, Practice, and Policy,* 2020, 12(S1), 87–89.

31　黒川雅代子・石井千賀子・中島聡美・瀬藤乃理子『あいまいな喪失と家族のレジリエンス－災害支援の新しいアプローチ』(誠信書房, 2019),6.

32　ポーリン・ボス (中島聡美・石井千賀子監訳)『あいまいな喪失とトラウマからの回復－家族とコミュニティのレジリエンス』(誠信書房, 2015),5.

あいまいな喪失には，戦争や自然災害による行方不明者の場合のように，心理的な存在がありながら身体的に不在な状況と，認知症や脳外傷で関係性が凍結してしまう場合のように，身体的な存在がありながら心理的に不在な状況との2つの形態があるとされ[33]，このような喪失は，私たちの人生において何度も起こる。コロナ・パンデミックにおいては，多くの人がさまざまな企業や組織，人から物理的に離れなければならなくなったために多くは前者の形をとるが，もし誰かがパンデミックのストレスによってうつ状態や引きこもりになれば，その人の家族は後者の形の喪失を経験する。私たちは，両者を同時に経験しているかもしれないのである[34]。

ボスは，コロナ感染拡大下，人々を最も悩ませてきたのは，コロナ・ウイルス自体ではなく，いつ終わるとも知れず続く，この災害を取り巻く状況の「あいまいさ」，混沌とした終わりのない「あいまいな喪失」の連続がもたらす閉塞感だと述べる。例えば，それまでの人生計画や希望の喪失あるいは挫折，健康についての安心の喪失，持っていた人間関係の喪失，家族や友人との接触の喪失，日常習慣の喪失，愛する家族を看取る機会の喪失，葬儀を行う機会の喪失，結婚式や卒業式を祝う機会の喪失，旅行する機会の喪失，生活を自分でコントロールすることの喪失，教会の人たちからサポートを得る機会の喪失，そして，対面で礼拝する自由の喪失[35] ― これらの喪失は見えにくいために明確には認識されないが，コロナ危機が始まって以来，事実上人々の生活から失われてしまった。そして，このような事態の完全な終結は一体いつになるのか，はっきりとはわからない。実際，社会の中で，いろんなことがストップした。むろん教会でも，それまで大切にされてきた教会の行事が次々と中止になった。それまで当たり前だったことが，すっかり中断してしまったのである。ボスは，あいまいな喪失は，コミュニティのレベルでも起こると言っている[36]。

33　ボス　『あいまいな喪失とトラウマからの回復』11-13.

34 Pauline Boss, *The Myth of Closure: Ambiguous Loss in a Time of Pandemic and Change*, W.W. Norton and Company, 2021, 11.

35　Boss, *The Myth of Closure,* 5-7.

36　*Ibid*., 14.

そして，いつ，もとのような生活に戻れるかはわからないために，新たな取り組みや意思決定ができない。気持ちを一新して現実や未来に新しく対処することが困難になっている。また，これらの喪失についてあまり語られないし，各人の受け止め方も違うため，人々は，どのように今起こっていることを理解し，どのように振舞ったら良いのか戸惑い，それまでの人間関係やはっきりしたアイデンティティが停止してしまう[37]。「あいまいな喪失」自体は精神疾患ではない。しかし，「世界は公正であるはず」という想定や信念が崩れ，しかも自分で状況を変えられないとき，悲嘆が凍結され，人は心に深い傷を受け，トラウマ的ともなる[38]。解決できない状況，はっきりしない状況の中で，長期にわたるストレスを受け続けて，私たちは疲れている。

ノンフィクション作家で終末医療の問題に詳しい柳田邦男は，「あいまいな喪失」の一つの様態として，肉親が面会することも付き添うこともできない新型コロナによる死を取り上げた。彼は最期に亡くなってゆく人との時を共に過ごせない現在のような状況は，残された人の心に「さよならを言えなかった」「最期の刻（とき）に側にいて手を握ってやれなかった」という強い悔いが残りかねないと言う。そして，そのような死別を「さよならのない別れ」と呼んで，「はっきりと『さよなら』と言って運命を受け入れる機会を持てなかった別れ」だと説明している[39]。

人間には，人には本来，困難な状況下でも健康を保つことができる力が備わっており，それをレジリエンス（回復力）という。ボスは，現在のような状況に耐えてゆくには，私たちが自らのレジリエンス，そして家族やコミュニティのレジリエンスを高めることによってあいまいな喪失が生むあいまいさ，答えのない問いを抱えるストレスや不安とともにより良く生きられるようになることが重要だと述べる[40]。支援者は，そのようなレジリエンスを高めるための支援を行う。ボスは，あいまいな喪失には終結はないと言う。喪失体験か

37　ボス『あいまいな喪失とトラウマからの回復』5-10.

38　Boss, *The Myth of Closure,* 9.

39　柳田邦男「コロナ死－『さよなら』なき別れ」『文藝春秋』2020 年 11 月号,294-305.

40　ボス『あいまいな喪失とトラウマからの回復』69-74.

らの早急な回復を求めるのではなく，白か黒か，善か悪かという二者択一的思考を止めてあいまいさを許容すること，そして，新しいことにチャレンジするリスクを冒すことが助けになると，ボスは述べる[41]。私たちに必要なのは，解決や意味づけを急ぐことではなく，白黒のつかない「あいまいさ」を抱えながら生きることである。彼女は，柔軟に物事に対処し，時にはユーモアを持って人生の道を歩いて行くことの大切さを呼びかける。

4　コロナ危機におけるパストラルケア

では，以上のような経験をした人々に，教会はどのような支援ができるのだろうか。コロナ危機において，隣人と共に生きるために，そして信仰を生き生きとしたものに保つために，キリスト者として大切なことは何だろうか。

教会共同体は，あいまいな喪失の体験に苦しんでいる人々にすぐれたサポートを提供することができる可能性を持っている[42]。また，キリスト者にとっては，信仰共同体こそが，喪失と悲しみに耐えてゆくための重要なコンテクストである[43]。言うまでもなく，毎週日曜日に礼拝のために集まり，皆で祈り，聖書の物語を共有することは，それ自体，悲しみの中にある人に自然な形でサポートを提供していることになる[44]。また，家族や教会などの共同体での人間関係やそこで行われる行事や礼拝などの儀式に参加することが大いに助けになることは言うまでもない。

牧会学者ジョン・パットンは，危機において牧会者（あるいは隣人とともに生きようとする人）に最も基本的なこととして，パストラル・プレゼンス(pastoral presence)と，注意深い（care-full ケアに満ちた）傾聴を挙げる[45]。では，パストラル・プレゼンスとはどのようなものだろうか。

41　Boss, *The Myth of Closure,* xix-xx.

42　Pauline Boss, “The Trauma and Complicated Grief of Ambiguous Loss.” *Pastoral Psychology* 59 (2010): 137-145.

43　Kenneth Mitchell and Herbert Anderson, *All Our Losses, All Our Griefs*, 171.

44　Kelley, *grief*, 90-92.

45　John Patton, *Pastoral Care: An Essential Guide* (Nashville: Abingdon Press, 2005), 56-60.

パストラル・プレゼンス

牧会者は，自分が牧会者である意味は，問題解決をすることにあるという考えにちとらわれがちである。しかし，危機においてもっとも大切なのは，「プレゼンス（共にいること）」というミニストリー（Ministry of Presence），すなわち「自分の全存在をあげてともにいること」である。パストラルケアのミニストリーとは，単にケアをされる人に具体的な救いの手を差し伸べるということではなく，誰かに自らを提供することである。誰かと「共にいる（be with）」ということは，牧会者の存在その人の全人格がそこに存在していることである[46]。そしてその際にキイとなるのは以下の事柄である。

（1）自分が経験していることに気づいていること[47]

パットンは，他者をケアしようとする人は，まず自分自身と自分が経験しつつあることに全面的に気づいている必要があると強調する。例えば，自分が最近親しい人を失ったことは，他の人の喪失体験から何を聞きとり，それにどのように反応するかということに大きく影響するかもしれない。相手に耳を傾けるよりも，自分自身の喪失体験について語りたいという誘惑にかられるかもしれないし，また一方では，他の人が悲しみについて語らないようにその話題を避けてしまうかもしれない[48]。牧会者は，自分の経験が，自分が相手の話を聞き，それに反応するときにどのような影響を与えるかについて，気づく必要がある。

（2）自分が自分を越えた存在を示していることに気づいていること[49]

キリスト者の信仰とは，神がわれわれと共にいてくださること ― 私たちがどこにいても神が私たちのことを覚えていて下さり，聴いていてくださること ― を信頼することである。その意味で，人を支援する場合にも，私たちが何を言うか，何ができるかが本質的なことがらではなく，主イエス・キリストの存在をもたらすことができる存在であるかどうかが大切である。

46　Patton, *Pastoral Care*, 22.
47　*Ibid*., 24-25.
48　*Ibid*., 24.
49　*Ibid*., 25-28.

(3) 他者のユニークな人間性に気づくこと[50]

神への信仰を持つ生き方には，悲しみや苦しみ，疑い，怒りなどの一見否定的な感情を経験することも含まれる。例えば，悲しみを表現するのを拒絶することは，私たちが神との関係にあることを否定することにもつながりかねない。私たちと共におられる神の存在に根ざす信仰があるからこそ，私たちは自由に悲しむことができるのである。

パットンは，聖書は，神についても人間の状況についても一つ以上の方法で語っていると述べる。聖書の中には，神学用語で語る声もあり，「箴言」のようにより実践的な倫理を語る声もある。「詩篇」には，信仰の証しの言葉もあれば，怒り，痛み，疑いの声もある。新約聖書においては，イエスをキリストと告白する証しはより一貫している。しかし，新約聖書においてさえ，ときには弟子トマスの疑いの声も聞かれる[51]。

パストラル・プレゼンスは，聖書からもケアを提供する人々からもこのような複雑な声をそのままに聞きとることを志向する。パストラルケアにおける知恵の多くは，信仰と教会の言葉だけに耳を傾けそれに応答することではなく，悲嘆，病気，依存症あるいは破綻した関係など，世俗的でネガティブな言葉に耳を傾け，それに応答することの中に存在する[52]。

ボスも，あいまいな喪失の経験を経験している者にとって大事なのは，自分自身及び世界についての見方を，簡単に白黒を付けないで以前に比べて複雑にとらえることであると述べる。あいまいな問題をありのままに受け止め，解決を目指すのではなく，忍耐の中で信仰や人間性が深められることによって困難と付き合ってゆくのである。

物語を「聴く」

悲しんでいる人が期待しているのは，問題の解決や助言ではなく，繰り返し話を聴いてもらうこと，一緒にいてもらい，心の奥深くにある思いを分かち合

---

50 Patton, *Pastoral Care*, 28-31.
51 *Ibid.*,30-31.
52 *Ibid.*, 31.

うことである[53]。「聴く」とは，相手への敬意という信念に基づいた一つの態度であり，裁いたり，断罪したりせずに，相手の苦しみ，望み，希望とともに，その人を理解するよう努めることである。誰かに話を聴いてもらうことで，人は自分の話に新たな一貫性を持たせることができるようになるからである[54]。

人が喪失経験から立ち直ってゆくためには，自分の中の怒り，誰かへの非難，恥の感覚などのネガティブな気持ちに触れ，それを何らかの形で表現することが必要だと言われる。たとえそれが痛みを伴うものであっても，私たちは人々の物語を聴き，人々が気持ちを表現することを助けようとするだろう。それは，相手とともに「荒野の経験」に入ってゆくことである。

パストラル・プレゼンスとは，時にはリスクを冒しながらも自分を相手との出会いの中に投げ込むことである。牧会学者ナウエンは言う。牧会者は，相手の苦痛を取り去ることを主な使命とはしない。むしろ彼/彼女は，互いに分かり合えるレベルにまで苦痛を深めるのである[55]。

意味を見出す

私たちが大きな喪失を経験する時，私たちの人生や信仰の物語と意味の体系には何が起こるのだろうか？私たちの人生を物語に例えるなら，喪失は，その物語の流れを突然中断するものである。大きな喪失経験は，私たちの人生の物語の一部あるいは全てを破壊し，その結果，私たちの自己の感覚を含め私たちの意味体系を脅かす[56]。そのとき，喪失によって混乱し，中断した物語を再び続行させるために，私たち著者は自分の人生の物語の筋書き，時には信仰の体系を変更しなければならなくなる。悲しんでいる人々は，喪失によってチャレンジされたその人の「意味の世界」を新たに作り直すために苦闘しているので

53　ニーマイヤー，97。

54　同上，85.

55　ヘンリ・J.M.ナウエン（西垣二一・岸本和世訳）『傷ついた癒し人-苦悩する現代社会と牧会者』(日本基督教団出版局,1981),130.

56　Robert A. Neimeyer, “Narrative Strategies in Grief Therapy,” *Journal of Constructivist Psychology,* 12 (1999):65-85.

ある[57]。

哲学者トーマス・アティッグは，グリーフの長いプロセスは「世界を学び直す」ための取り組みだと考えた[58]。アティッグは，喪失についてのその人特有の物語（story）を強調する。悲しむ人は，現在の生活に一貫性をもたせ，自分の人生の物語を完成させ，自分をより大きな共同体の一部として位置づける新しい方法を探りながら，この世界を新たに学び直そうとする[59]。

「意味」を理解するのに最も大切なのは，「物語」である。私たちの意味の体系は，私たちの物語に根ざしており，物語を通じて表現される。私たちの人生も信仰生活も物語に根付いている。例えば，私たちは，新約聖書の書き手による「物語」を通じてナザレのイエスを知るのである[60]。「聴くこと」において大切なのは，ただ単に話に耳を傾けることではなく，喪失の体験という苦難の出来事のなかに現れているその人の「物語」を，謙虚に聴き取ろうとすることであり，意味の解釈や説明は当面必要ない。

「神われらとともに」という祈り

人は，他者の存在の中で神の存在を経験する。それゆえ，パストラル・プレゼンスは，人が神の存在を経験するための重要な手段となる。牧会者は，苦しみにある人が一人きりではないこと，神が痛みや苦しみを共に負ってくださることを思い起こさせる存在である。また，牧会は，私たちが実際に何を言うか，具体的に何ができるかではなく，本質的には，関係の中に主イエス・キリストの存在をもたらす存在であることへと向かう[61]。

キリスト者の信仰による希望は現実逃避とは異なる。ヘブライ語聖書の詩篇の中には，絶望的な感情の噴出の表現や，耐えがたい痛みや怒りの表現が見ら

57　Robert A. Neimeyer, H. Prigerson & B. Davies,“Mourning and Meaning,” *American Behavioral Scientist* 46 no. 2(2002):239. https://doi.org/10.1177/000276402236676

58　トーマス・アティッグ（林大訳）『死別の悲しみに向き合う』(大月書店,1998)，121 以下.

59　Patton, *Pastoral Care*, 55.

60　Kelly, *grief,* 76-77.

61　*Ibid*., 14.

れる。人々は神と共同体の前で苦情を言い，叫び，反論し，怒りと絶望を訴える。それらは一見神に作られた世界の破綻の現れのように見えるが，実は神への深い信頼に基づく信仰の表現なのである。そして，しばしば，神は苦悩の叫び声に対して沈黙のまま答えないし，安易な慰めは与えられない。

使徒パウロは，神の救いは，この世の現実の中での，「うめき」と「産みの苦しみ」のただ中で与えられると説いた。（ローマの信徒への手紙8：22～25）パウロは，苦しみや呻きの中にあって将来の栄光や救いの完成を待ち望む希望，という「緊張」の中に生きる人生こそが，現実を生き抜くキリスト者の生だと考えたのである。彼は，「まだ見ていないものを望んでいる」と語り，まだ私たちが見ていない，あるいは見えていない新しい世界，新しい始まりを確信していた。

加えて，現在のキリスト教の霊性と牧会活動において，神学的な問題の一つは，このパンデミックの中で私たちは神をどのように見ているかということだろう[62]。今のこの時，私たちにとって神はどのような神だろうか。

牧会学者ヘンリ・ナウェンは，キリスト者の霊性においては孤独，死，弱さという人間の限界を見つめることが重要だと繰り返し述べ，自らの傷を通して人と出会う「傷ついた癒し人」としての救い主のイメージを示した[63]。彼によれば，神は私たちと共に苦しみ，共感する方である。神は感情を持たない方ではない。

また，南アフリカの神学者 D. J. Louw は，コロナ危機の時代における「苦しむ神」のイメージの重要性に触れ，「苦しむ神に出会うことは，…愛に満ちた『共におられる』神，傷ついた癒し手としての神に出会うことである。」と述べる[64]。キリストにおける希望は，私たちの世界にある苦しみの現実を回避しない。神ご自身が，キリストにおいてこの世界の悲惨のただ中に入ってこられ

62　Louw, “The Aesthetics of Covid-19 within the Pandemic of the Corona Crisis. From Loss and Grief to Silence and Simplicity-A Philosophical and Pastoral Approach.”

63　ナウエン『傷ついた癒し人』114-135.

64　Louw, “The Aesthetics of Covid-19 within the Pandemic of the Corona Crisis. From Loss and Grief to Silence and Simplicity-A Philosophical and Pastoral Approach.”

たからである。そして，神は私たちに伴い，慰めと助けを与えられる。イエス・キリストの生と死と復活の出来事は，どのような状況においても，神は私たちとともに痛みを担ってくださる方であるということを証ししている。

牧会学者 Mitchell and Anderson は次のように述べる。

> 人間であるということは，限界を持っているということであり，苦しみを経験するということである。苦しみによって生み出された孤立感は，十字架につけられた神が常に私たちと共に苦しんでくださっているという「約束（assurance）」によって変容させられる。私たちが悲しんでいる人のそばでその人と共に苦しむことを可能にしてくださるのは，そのような神である[65]。（才藤訳）

変革への参与

では，私たちはどうすべきなのだろうか。ここで先に取り上げた南アフリカの実践神学者 Christoffel H. Thesnaa の言葉を紹介したい。彼は，コロナ危機の中で教会が問うべきことは，私たちは苦しんでいる人々の隣人であり得ているのかということだと言う。信仰に基づくコミュニティは，社会の公正を求めるように期待されている。しかし，人間としての限界を抱えた私たちは，他者の苦しみを本当に理解することができるのだろうか？

彼は，それは，私たち自らが自分にとって不快な現実によって心をかき乱されることから始まると言う。南アフリカの教会にとっては，それは，長年の植民地政策，人種差別政策によって引き起こされ，多世代・多層にわたっている，凍りついたトラウマの歴史に向き合うことである。彼は，自分たちは，コロナ危機の中でも，過去の不正によって引き起こされたトラウマにどう対応するか，次の世代に何を引き継ぐかについて責任を負うと論じている[66]。

65　Mitchell & Anderson, *All Our Losses, All Our Griefs*,138.

66　Thesnaa, “Divine Discomfort: A Relational Encounter with Multi-Generational and Multi-Layered Trauma.”

おわりに

私は，今日の教会の責務の一つは，社会的に不利な立場に置かれた人々，悲しみと痛みの中にある人々の物語に耳を傾け，その意味を探り，それぞれの場所で変革への歩みを進めることにあると考える。教会の内にも，外にも，また，私たち自身の中にも，悲しんでいる誰かがいる。今日，一体どこに十字架につけられているキリストがおられるのか，どこに苦しんでいる人々がいるのか，それを発見するのは私たちの責任である。

その観点から見ると，筆者がこの小論でなし得たことは単なる始まりの一歩にすぎない。次の課題は，日本というコンテクストにおいてコロナ危機の中で，どこで，だれが，どのように苦しんでいるのか，彼らが何をどう喪失したのか，どうすれば良いのかを考察し，実践することだと考える。

追　記

この論文は，筆者が行った西南コミュニティセンター主催オンライン講座「西南学院大学2021年度コミュニティカレッジ『コロナ時代に神学は何を語るか』シリーズの第４回「実践神学から～コロナ時代のこころのケア」（2021年11月９日）という講演と，日本バプテスト連盟南九地方連合大会（2023年１月22日）における「危機の時代に生きる私たちの希望」という講演を基にし，それらに大幅に手を加えたものである。

参考文献

アティッグ，トーマス　（林　大訳）『死別の悲しみに向き合う』　大月書店, 1998年.

Bertuccio, Rebecca F., & Megan C. Runion. “Considering Grief in Mental Health Outcomes of COVID-19.” *Psychological Trauma: Theory, Research, Practice, and Policy 12*(S1) (*2020)* 87－89.

Boaheng, Isaac. “Christianity and the COVID-19 Pandemic: A Pastoral and Theological Reflection from the Ghanaian Context.” *Journal of Pastoral Theology* Volume 31 (2021) Issue 2－3, 224－237.

Boss, Pauline. “The Trauma and Complicated Grief of Ambiguous Loss.” *Pastoral Psychology* 59 (2010) 137－145.

ボス, ポーリン（中島聡美・石井千賀子監訳）『あいまいな喪失とトラウマからの回復－家族とコミュニティのレジリエンス』 誠信書房, 2015.

Boss, Pauline. *The Myth of Closure: Ambiguous Loss in a Time of Pandemic and Change*. W.W. Norton and Company, 2021.

Bramstedt, Katrina A., COVID-19 as a Cause of Death for Catholic Priests in Italy: An Ethical and Occupational Health Crisis, *Health and Social Care Chaplaincy* Vol. 8 No.2 (2020). 180－190.

Brock, Rita Nakashima. ”The Pandemic Paradox-George Floyd, Moral Injury, and the Sustainability of Social Movement.” In Zachary Moon(ed.) *Doing Theology in Pandemics: Facing Viruses, Violence, and Vitriol*. Eugene: Pickwick Publication, 2022. 1－14.

キャプラン, G. （山本和夫訳）『地域精神衛生の理論と実際』医学書院, 1968.

Carey, Lindsay B., Chris Swift & Meg Burton. “Editorial, COVID-19: Multinational Perspectives of Providing Chaplaincy, Pastoral, and Spiritual Care.” *Health and Social Care Chaplaincy (HSCC)* 8.2 (2020) 133－142.

Chu, Calida, “Theology of the Pain of God in the Era of COVID-19: The Reflections on Sufferings by Three Hong Kong Churches through Online Services.” *Practical Theology* Vo.14 Nos.1－2 (2021) 22－34.

Divine, M. (2020, April 5). UMN Family Therapist Q&A: Grieving the Losses Amid Coronavirus Pandemic. *Pioneer Press*. https://www.twincities.com/2020/04/05/umn-family-therapist-qa-grieving-the-losses-amid-coronavirus-pandemic/ (参照2023.01.16.)

圓増文「深刻化する社会経済的格差と健康格差の悪循環」大北全俊他著『「コロナ」がもたらした倫理的ジレンマーパンデミックは私たちをどう変えたか』日本看護協会出版会, 2022, 55－63.

Harris, James C. “Self-Portrait after Spanish flu.” *Arch Gen Psychiatr*y 63(4) (2006) 354－355. doi:10.1001/archpsyc.63.4.354

Hove, Rabson. “The Pastoral Presence in Absence: Challenges and Opportunities of Pastoral Care in the Context of the Global Coronavirus Pandemic.” *Pharos Journal of Theology* online Volume 103 (2022). https://doi.org/10.46222/pharosjot.10319

Kelley, Melissa M. *grief: Contemporary Theory and the Practice of Ministry*. Minneapolis: Fortress Press, 2010.

厚生労働省「データからわかる－新型コロナウイルス感染症情報－」 https://covid19.mhlw.go.jp/ (参照2023-01-17)

黒川雅代子・石井千賀子・中島聡美・瀬藤乃理子(編著) 『あいまいな喪失と家族のレジリエンス－災害支援の新しいアプローチ』 誠信書房, 2019.

Louw, D. J., “The Aesthetics of Covid-19 within the Pandemic of the Corona Crisis. From Loss and Grief to Silence and Simplicity -a Philosophical and Pastoral Approach.” *Acta Theologica* vol. 40 n.2, (2020). 125－149.

Matson, Viki. Grieving *Kairos* Moments, *Journal of Pastoral Care and Counseling*, 75(1) (2021). https://doi.org/10.1177/1542305020953774

Mitchell, Kenneth & Herbert Anderson. *All Our Losses, All Our Griefs: Resources for Pastoral Care.* Louisville: The Westminster John Knox Press, 1983.

Murphy, Karen. “Death and Grieving in a Changing Landscape: Facing the Death of a Loved One and Experiencing Grief during COVID-19.” *Health and Social Care Chaplaincy* Vol. 8 No. 2 (2020). 240－250.

ニーメヤー，ロバート・A.（鈴木剛子訳）『〈大切なもの〉を失ったあなたに－喪失をのりこえるガイド』 春秋社, 2006.

Neimeyer, A. Robert. “Narrative Strategies in Grief Therapy.” *Journal of Constructivist Psychology* 12 (1999) 65－85.

Neimeyer, A. Robert, H. Prigerson & B. Davies. “Mourning and Meaning.” *American Behavioral Scientist* 46, no.2 (2002) 235－251. https://doi.org/10.1177/000276402236676

NHK ニュース「新型コロナ国内初確認から3年『不安だ』依然84％　NHK 世論調査」NHK WEB, 2023-01-15.

https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230115/k10013950241000.html（参照2023-01-15）.

ナウエン，ヘンリ・J.M.（西垣二一・岸本和世訳）『傷ついた癒し人-苦悩する現代社会と牧会者』 日本基督教団出版局, 1981.

Oates, Wayne E. *Grief, Transition, and Loss: A Pastor's Practical Guide*. Minneapolis: Fortress Press, 1997.

Pappas, Stephanie. “Helping Patients Cope with COVID-19 Grief：The Pandemic has Drastically Altered the Way People Mourn.” American Psychological Association, *Monitor on Psychology* Vol. 52 No. 4, 38.　June 1, 2021. https://www.apa.org/monitor/2021/06/ce-covid-grief

Patton, John. *Pastoral Care: An Essential Guide*. Nashville: Abingdon Press, 2005.

坂口幸弘・赤田ちづる「コロナ禍における死別－新たな遺族支援の展開を探る－」『人間福祉学研究』14(1)53－73, 2021.

島薗進「新たな感染症の時代の弔いとケア－宗教的なものの新たな様態－」『宗教研究』95(2), 2021, 32－35.

Thesnaa, Christoffel H. “Divine Discomfort: A Relational Encounter with Multi-Generational and Multi-Layered Trauma.” *Religions* 13(3) (2022)214.

Weir, Kirsten. Grief and COVID-19: Mourning Our Bygone Lives. *American Psychological Association Home Page*（April 1, 2020）　https://www.apa.org/news/apa/2020/grief-covid-19 (参照2023-01-17)

Wu, Ping., et al. Alcohol Abuse/Dependence Symptoms among Hospital Employees Exposed to a SARS Outbreak. *Alcohol and Alcoholism* 43(6) (2008) 706-712, https://doi.org/10.1093/alcalc/agn073.

山田昌弘　『新型格差社会』　朝日新聞出版, 2021.

柳田邦男「コロナ死－『さよなら』なき別れ」『文藝春秋』　2020年11月号, 294－305.

讀賣新聞　「第8波のコロナ死者，9割超が70歳以上…高齢者施設の感染者対策『特に重要』」2023-01-15，讀賣新聞オンライン　https://www.yomiuri.co.jp/politics/20230114-OYT1T50289/　（参照2023-01-19）